

アンデレ便り

召命黙想会

今回は、新進気鋭の片柳神父（六甲カトリック教会）を指導者にお招きし、宝塚・売布で開催されました。神の声を聴く重要な手段として黙想が位置づけられますが、語るに易く、神の臨在を実感するのはまれでしかない、というのが私の偽らざる感想です。

私は2日目の夕食後のセッションを担当しました。今回はケレー神父の「Calling・召命」を題材にしました。これは戦前、ケレー神父が聖公会神学院教授のとき、神学生に対する大斎節黙想のときに話されたものです。

ケレー神父は、聖職への召命に先立ち、自分自身はいったいどのような人間であるかを、あらゆる機会を捉えて検証する必要があると強調します。以下はその講話の要約です。

不真実 (Unreality)

神学生のなかには、勉強熱心な者もいる。しかし、本当のものを学ぼうとしているどうか疑わしい。神学生は、自分自身を理解することから始めなければならない。日本の多くの神学生は自分への理解をいやがるようだ。理解している振りをするならば、全く愚かなことだ。愚かで、間違いを犯す存在である自分への理解を恐れてはならない。

利己主義 (selfishness)

利己的人間は自分の益となることしか考えない。思いやりがあり、誰にも親切そうに見える人は、善い人間であると見られている。しかし、この人たちは信頼に値しない。何故なら、いつも自分本位で、自分の楽しみについてしか考えないからである。表面上、利己的でないように見える人というのは、その実、利己主義者なのである。

不真実と利己主義は偽善という絆で結ばれている兄弟関係にある。利己主義は自分の真実な姿を見るのが嫌いであるから、自分が利己的であると思わない。何故なら、利己的な自分を高尚なもので覆い隠しているからだ。

利己的でない人間は、利己的な人間よりも、もっと多くの楽しみをもっている。それは、単に楽しみを求めるのではなく、役立つから楽しみを追求するのである。

不信仰 (unbelief)

様々な理論は、私たち自身について、理想について、完成について、人生の真理や真実について語る。完成・真理・真実を人間の側に求めること、これが自己愛 (self love) であり、その追求は自己信仰となる。真理・真実・完全は神の側にある。これらを神を信じる信仰によって求めなければならない。

わずか1時間の黙想でも、まるでハエが目の前を飛び回り、追い払ってもしつこくまとわりつくように、色々な思いが頭に浮かんでは消え、消えては浮かんでいきます。自分自身との対話に忙しく神の声は全く聞こえません。この状態こそ、自分の弱さ、罪深さを現しているともいえます。自分の露わな姿を認識するうえでも、黙想は必要なのです。しかしその状態に留まっているだけでは意味はありません。このような時「(心よ) 静まれ、わたしを神と知れ (詩46編)」と自分に叱咤する必要があります。心を真っ暗にし、暗闇の中を明かりも持たずに歩み始める準備が整ったとき、神が寄り添い、留まる(メノー)ことが可能となります。

広島平和礼拝2009・教区中高生大会

原爆が投下されて64年、原爆の悲惨さの風化を阻止し、平和の尊さをどのようにして次世代の人たちに継承するかの大きな課題を担いつつ、今年で5回目を迎えた平和礼拝では、東謙吉さんの被爆体験を聞きました。

被爆証言と記憶

東さんは広島高等師範2年生の時に、学徒動員先の東洋工業で被爆された方です。千田町にある校舎に学生・先生の安否を確認するために毎日工場から街に出かけ、黒こげになり、橋のたもとに放置され異臭を放つ多くの死体に遭遇されました。言語に絶する光景を、言葉を用いて表現し、聞く者の理解を得ることがどれだけ困難であるかを、東さんの一つひとつの言葉から読み取ることができました。

同じ時期に広島で開催された中高生大会のテーマの一つは「メモリー・記憶」です。原爆の痕跡を私たちが実際に目で見て知り得るのは、原爆ドームと資料館に展示されている展示物です。原爆ドーム以外の建物や慰霊碑は、原爆による記憶や証言がかたちとなったものなのです。

聞こえはじめた市民の声

原爆記念日の式典を最初に行ったのは進駐軍だという話を聞いたことがあります。焦土と化した市内に飛行機が飛来し、原爆ドーム近くに花束を投下するという簡単なものでした。1950年代に入り、広島は共産主義、社会主義イデオロギー主張の場になりました。ある集会で、指導者が社会主義国家ソ連をしきりに褒め称えます。これを側で聞いていた、被爆者を両親にもつ広島の学生は怒りがこみ上げてきました。とうとう、我慢することができずに壇上に駆け上り「度重なるソ連の核実験はとても許されるものではない」とマイクを奪って絶叫しました。しかし、この学生は即座に羽交い締めになされ、壇上から引きずりおろされたのでした。

核を保有するソ連や中国は善意の国であるから問題はないが、帝国主義国家アメリカは断固として許せないのです。ソ連崩壊と共に冷戦時代が幕を閉じ、同時にイデオロギーに裏付けされた特定の国家の、核に対する正当性や主張が力をなくし、ようやく市民レベルでの平和に関する主張や提言が聞こえるようになりました。

私事で申し訳ありませんが、1946年8月5日、下関から私の父は広島の貫節（貫主税司祭のご子息）宅を訪れ一泊、6日の朝、原爆1周年記念聖餐式を貫宅で行いました。戦中、広島降臨教会（聖公会）は合同問題で紛糾し、解散を決議、当時、教籍は日本基督教団流川教会に移されたままの状態でした。原爆記念日に聖公会の聖餐式が行われたのは貫宅が最初であったと思います。

広島復活教会では、被爆者の佐藤眞一司祭などからの提言をもとにして、昨年より、原爆投下の時刻に合わせて原爆犠牲者追悼聖餐式を行っております。8月6日午前8時15分、復活教会に行けば祈りが献げられている、これが聖公会信徒の平和希求の原点です。

中高生大会や平和礼拝には多くの若者が参加しました。二度とこのような悲惨な状態に人間を貶めてはいけないと訴える被爆者の声が、参加者の心に揺さぶりをかけたことを期待するものです。